

論文

明治京都における官製「美術」概念の受容

——京都の博覧会と美術商・「美術館」をめぐって——

山本 真紗子*

はじめに

1990年代以降北澤憲昭・木下直之・佐藤道信らの成果¹を皮切りに、近代におけるわが国の「美術」概念や「美術」制度の成立過程はかなりの部分明らかにされてきた。しかし、明治政府≒東京での政策や動向がわが国の「美術」概念受容をリードしており、わが国全体の受容過程を端的に示すという暗黙の了解のせい（そうした面が多分にあることを否定するものではないが）、東京以外の地域での官製「美術」概念の理解や受容の経緯は意外に考察が進んでいないといえる。

本稿は、まず明治期の京都の「美術」概念の受容過程の一側面をあらわすものとして、京都博覧会や第4回内国勸業博覧会の様相をとりあげ、京都でおこった変化と関連付けながら論じる。明治政府は殖産興業政策や対外政策の一環として「万国博覧会」を重要視し、国内でも在来の産業の奨励や欧米の先端技術の移植、知識・情報の普及の推進をはかるため明治10(1877)年より「内国勸業博覧会」(以下・内勸博)を開催した²。京都は内勸博以前に「京都博覧会」を開催、規模や内容を変えつつ明治4(1871)年から昭和3(1928)年まで56回にわたり開催された³。京都博覧会について丸山宏⁴、小林丈弘⁵がその企画意図を京都の文明開化と経済的復興政策のひとつとして位置づけ、吉岡拓は中央官僚による「旧慣」保存とは別の、京都地域自身から始まる「伝統都市」として立とうとする動きをその展示内容の変化から見出した⁶。また、「美術」概念の検討という面からは、中谷至宏⁷が展示品の販売制度を元に「作品」概念の検討をおこない、並木誠士⁸が明治4年、5年の京都博覧会をとりあげ、博覧会開催の経緯や両年の出品物を比較し、両博覧会における「古美術」が政府の古美術保護政策の影響をうけつつ変化したことを指摘している。これらの先行研究は、中谷を除きいずれも博覧会開始直後の考察が中心で、その後の変化などについては触れられていない点も多い。本稿では明治20年代までの京都博覧会のおおまかな流れを見ながら、列品区分や品評(審査)区分をもとに「美術」概念の受容について確認する。並木は、「美術」概念研究の東京偏重を相対化するために京都をとりあげる意義を指摘した上で考察をおこなっており、本稿の立場もそれに続くものであるが、並木がとりあげなかった各回の出品人や明治6年以降の博覧会も考察の対象とすることで、「官製」の美術概念が形成される東京と京都との違いをより明確化できると考えている。

さらに、東京との差異を特徴付けるものとして京都の「美術商」の活動の一端をあきらかにする。本稿に先行するものとして佐藤道信や東京美術倶楽部百年史が⁹近代の「美術商」の概略を論じているほか、明治初期の日本の美術品・工芸品の輸出業者である起立工商会社¹⁰、林忠正¹¹、山中商会¹²などに関する個別研究と、菅靖子¹³によるイギリス系商社の研究がある。なかでも樋田豊次郎¹⁴は「直輸出」(外国人を通じた商館貿易ではなく、日本人が直接輸入者・輸出者と貿易をおこなうこと)の日本人貿易商に焦点をあて、彼らを明治の工芸界における実践的指導者として位置づけ、多くの会社や人物の経歴をあきらかにしたが、その研究対象は主に東京・横浜方面であった。筆者は明治の京都で活動した美術商の活動の一端をとりあげ樋田による成果に若干の事例を加えると共に、京都の

キーワード：明治時代、京都、美術商、博覧会、東山

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 表象領域

独自性として、東山地域や外国人観光客との関係を取りあげたい。京都は地場産業として質の良い美術工芸品がはやくから生産されてきたこともあり、それらの一部は維新前から海外へと輸出されていた。加えて、地元でも京都博覧会を通じそれらの製品が展示・販売される。明治政府の「美術」政策とも関連しながら地域の経済策のひとつとして美術製造や販売が利用されるとき、そこで製造や販売をになった「美術商」らがどのように対応しようとしてきたかを見ていきたい。

1 京都博覧会の開催

明治維新後、明治2(1869)年の天皇東幸(事実上の東京遷都)に象徴される、経済的・精神的打撃をうけた京都では、当時行政を実質的に担っていた有力商人を中心に挽回を期してさまざまな事業にとりくむ。そのうちのひとつが「京都博覧会」の開催で、明治4(1869)年三井八郎右衛門(高福)、小野善助(包賢)、熊谷久右衛門(直孝)の3名を中心に府の協力を得て、10月10日から11月11日までの約1ヶ月間、西本願寺書院にて日本初の「博覧会」として開催された。同時に京都博覧会社が設立、以降昭和にいたるまで出品規模・期間・出品物の変化はあるがほぼ毎年開催される。

この博覧会はそもそも京都の産業や経済の発展を目的としており、外国人の来場が重要視されていた。明治5(1872)年の第1回京都博覧会は、当時居留地外に自由に行き来できなかった外国人のために特別の入京規則を設け、宿泊施設・飲食のメニュー・警備体制なども細かに整えられた結果、来観者は日本人46935人に対し外国人770人を数えた。このときの外国人用の宿舎は知恩院塔中5ヶ所(「公使貴族旅宿」)、同山内、円山、下河原辺19ヶ所(「外客相対宿」)があてられた。以降、入場者は開催期間の長短などにも影響され、多いときで33万人強、少ない時期で5万人前後と大きく変動するが、外国人は常に300~500人ほど訪れており、一定の人気を有していたことがわかる。

外国人宿泊所にあてられた東山は社寺が多くその門前や廻りに町々が展開し、近世には祇園新地の開発をはじめ遊所が発展、円山の長楽寺・双林寺などでは書画会・花会などの催し物がしばしばおこなわれた。明治維新後も有楽館や円山正阿弥楼、円山牡丹園で書画会や絵画の展覧会がひらかれる。祇園烏居前の中村屋が明治元年に洋間8室を備えたほか、フェノロサ夫妻が滞在した明治21(1888)年創業の旅館「京都常盤」(二条橋西詰)をはじめ¹⁵、自由亭、也阿弥ホテル等の洋風旅館ができる¹⁶。さらに北垣国道知事が鴨川東岸一帯を京都市に編入し疎水を中心とする近代都市の建設を構想し開発を進め、一方では山県有朋の無隣庵など東西の貴顕の別邸や邸宅地が形成される¹⁷など近代以降大きく様変わりした。

さて、京都博覧会で実際にどのような品物が出品されたのか。公刊された明治4年から9年までの出品目録¹⁸を元に初期の目立つ特徴をいくつか挙げてみたい。産業振興・技術発展という博覧会の目的にあわせ機械類や外国製品の展示、動植物の展示、生糸類など製品のほか、美術品では陶磁器などの新製造品といわゆる書画古器物が展示された。中谷至宏の分析¹⁹によると京都博覧会は第1回より出品規定において理由のある非売品を除き販売を前提とした展示をおこなっており、数多くの品物が博覧会を通じて売却された。第2回(明治6年)からは博覧会閉場後出品の優劣を審議する品評会が、第4回(明治8年)からは賞牌の授与がはじまる。毎回の出品数の半数ほどを売品が占め、売却点数・売却高の変動はあるにせよ売却が毎回ある点から、中谷は博覧会という場が「販売が主目的ではないにしても、確実に美術品の購買機会であった」と指摘する。

では出品者はどういった人々であったか(表)。表からあきらかなように、三井・鳩居堂(熊谷)・小野ら博覧会開催の発企者をはじめ川辺九郎三郎、下村正太郎、市田文治郎、井上治郎兵衛、山本弥太郎など博覧会関係者が多数出品しており、博覧会初期は有志の持ち寄りに頼っていたと考えられる。彼らは呉服商など地場産業の業者であり、もともと江戸時代よりの裕福な町人であった。自店の販売品である新製造品を出品すると同時に、茶器をはじめとする所蔵品の出品も多くおこなっている。鷹司家諸大夫の小林良孝ほか寺・公家関係からの出品も多い(神社は上賀茂神社が明治8年に数品出すなどの例外のぞきはほぼ出品なし)。明治5年99点の刀を出品した刀商社も新製造品ではなく、武家を中心に所蔵されていた刀剣を集め出品したものと思われる。

そうしたなか最も売品の出品が多かったのが「骨董商」²⁰である。熊谷(鳩居堂)も当時の商工便覧では骨董商と分類され²¹、判明しただけで、葉山堂²²(骨董商)、清雅堂(島川長次郎・骨董商・堺町三條)、国松栄吉(茶器商・

富小路二条)、杉田三郎助(市村屋・書画骨董商・四条寺町)、林新助(中道具商)、山中吉兵衛(茶器商・大阪)²³が在る。

さらに骨董商は博覧会内において品評方としても参加していた。明治8年からは品評方が「本草家^(マツ)友染織物/縮緬/呉服/古裂巾/外療道具/陶磁器/骨董/刀剣/描金/漆器/銅器/画/鋳物/彫鐫」に増員され、専門的な評価を与えるようになった。陶磁器に高橋道八・真清水蔵六らがあたるなど製造業者の有力・優秀な者が担当することになったようだが、「骨董」は国松栄吉・大橋四五六・熊谷彌右衛門・熊谷久兵衛が担当した。国松は茶器商(前出)、熊谷姓が二人いるが両者ともに鳩居堂関係者かと思われる(大橋については不明)。

以上、京都博覧会は地元の有力商人を中心に開始、運営されており、当初は万国博の参加の経験などから試行錯誤しつつ運営していたと思われる、出品のほか品評においても彼らが中心となって開催されていた。美術工芸品は当時の日本にとって数少ない輸出品・産業で政府もその発展に力をそそぎ、京都は有力地域のひとつとして近代化、工業都市化の期待がよせられており、品評も技術的な巧拙以外に輸出品としてよりよい形態や図案のためのコメントが求められた²⁵。一方、いわゆる古器物も骨董商の売品として多く出品され、その品評にも骨董商が関わっていた。その評価の基準は、おそらく茶の湯に代表されるような伝統的な価値観であったのではないだろうか。売却先が不明のため確認できないが、外国人の手に渡ったものも少なくなかったであろう。海外輸出や外国人との交渉がまだ限定的であった当時、京都の商人たちにとって京都博覧会は神戸以外の外国人との貴重な接点であり、新古美術品展示の場であり、それらの品物が販売によって移動する場であった。

2 「美術」概念の普及と内国勸業博覧会

明治政府の殖産興業政策の一環として東京で明治10(1877)年に第1回内国勸業博覧会が開催されると、京都博覧会でもその影響が出品分類や審査の体制に変化が見られるようになる。まず、明治9年(第5回)から、それまで一定していなかった出品区分が、順序・内容に多少の違いはあるものの内勸博とほぼ同様の5~6区に分類に固定される。また、毎回ある品評会も明治9年に内務省より係官の派遣が要請され、以後明治12年までは「審査官」として参加するようになり、中央政府の意向が意識されていく²⁶。「骨董」の品評方はしばらく継続するものの明治17(1884)年(第13回)からはなくなり、明治18(1885)年(第14回)には品評委員の類別が6種(絵画24人・生糸繭5人・織染18人・器械4人・農産農具紙飲食24人・陶銅漆器其他諸雑品37人)となっていわゆる美術品としては絵画とそれ以外のものに分類されるようになった。品評の分類も前年の「画」から「絵画」へと名称が変化しており、「骨董」「書」「画」といった従来の概念から「美術」「絵画」など新しい概念に変換されていくのである。

明治28(1895)年の第24回にはさらに大きな変化が生じた。京都の有力商人で構成されていた京都博覧会社の社員に、設置が決定されたばかりの帝国^(マツ)京都博物館²⁷の関係者が参加するのである。出品鑑別委員として帝国京都博物館長山高信雄・同館員青山盈教が、出品鑑別及陳列装飾委員として京都市美術工芸学校長今泉雄作が、出品陳列装飾及蒐集委員に帝国京都博物館員大澤敬之が参加、それまで審査を担当していた博覧会社員は出品蒐集委員・出品蒐集及陳列装飾委員・出品陳列装飾委員のいずれかに配置された。

明治初期の「美術館」とは、明治10(1877)年第1回内国勸業博覧会のなかに「美術館(*入口に Fine Art Gallery の額を掛ける)」と名のつく展示施設が設けられたのが初めて、以後内勸博には展示場の一つとして必ず設けられた。これは同時代のものを展示するスペースであり、かつ一時的なもので、今日のようなほぼ恒久的に展示活動をおこなう「美術館」は大正15年東京府の新美術館(現・東京都美術館)建設まで待たなくてはならないようだ。つまり、当時「美術館」としてイメージされるものは、まず内勸博会場内の「美術」品展示の会場であり、それは同時代の「美術」を展示するところであった。明治28年内勸博では、岡崎地区に遷都千百年記念祭祀年殿(平安神宮)や工業館・農林館などとともに「西洋形木造二階建屋根瓦葺」の建物として「美術館」が建設される。まず屏風や日本画を、ついで刺繍品と油彩画を優先的に見せるための部屋の配分がおこなわれ、「飾箱」や「書画掛」などの鑑賞用什器の作成など、展示空間としての新たな試みもおこなわれた²⁸。すでに東山七条には洋館の帝国京都博物館が竣工を控えており、恒久的な「美術」展示の場がこのころ京都にもつくられようとしていたのである。

展示分類も、出品種別の展示をした内勸博との重複をさけるためか、出品物を「歴史」的に構成した。「時代品ノ

種目」が「御物（宮内省式部寮出品・賀茂御祖神社出品）」と「延暦時代・藤原時代・鎌倉時代・足利時代・豊臣時代・徳川時代」にわけられ²⁹、同時代の「明治大家ノ製作品（明治元年ヨリ本年ニ至ル故人大家ノ製作品）」と中国歴代王朝別の展示（唐・宋・元・明・歴代）、附属として「征清戦利品」「前館及園中ノ諸館」「普通売品」が設けられた。わが国の最初の「日本美術史」叙述は明治33年パリ万博にむけて出版された『稿本日本帝国美術略史』とされているがそれより早く、「日本美術史」に基づいた作品展示の嚆矢といえよう。

内務省の役員らが京都博覧会の運営に参加しはじめると、製造業者は引き続き運営にも出品にも関わっていくが骨董商は品評からは離れていく（離れざるを得なくなる）。さらに京都での内勤博開催に前後して、京都に美術館や美術学校³⁰が建設され「美術」制度確立のための装置が整備されはじめると、京都博覧会にも「美術」制度の推進者ともいえる人々の関与が大きくなり「日本美術史」編纂を基準とした展示もおこなわれるなど、「美術」概念が大きく影響を及ぼすようになる。京都という地域内での評価や文人墨客らの趣味・価値基準が次第に評価の軸としては失われていき、明治政府主導の殖産興業政策や官製の「美術」概念・「日本美術史」による評価が成り代わるのである。明治20年代半ばより、しだいに展覧会という場、とくに絵画をめぐる環境が販売という要素をそぎ落とそうとしていくことに象徴される³¹ように、「美術」という概念が次第に固定されていくにつれ、展示の場からは鑑賞以外の要素が排除され、とくに骨董商らの活動・そこで共有されてきた前代の価値基準や意識は相容れないものとして「美術」の枠の外へとおしやられてしまったのである。

3 二つの「美術館」

京都博覧会の運営から離れてしまった骨董商たちであったが、「美術」品を扱う商人たちの活動は依然として盛んであり、海外への進出などをもくろみ活発であったとも言える。明治20年代になると、それまでの骨董商とは別に、美術品を輸出する業者や外国人相手の会社もいくつかあらわれるようになる。商工便覧でも明治10年代には「骨董商」「茶器商」等扱う品・ジャンルを指す名称であったのが、明治20年代ごろより、より包括的な名称である「美術館」と呼ばれるようになった。

そうした動きを端的にしめすように、明治19（1886）年6月15日には京都市真葛原に、金銀銅器、陶器、漆器、織物、骨董をならべ販売するという「美工商社」が設立された³²。この会社は陶器商錦光山宗兵衛、繡箔商井上徳三郎・田中利七、美術商林新助、神戸の池田宗兵衛、大阪の山中吉兵衛が発起人となって設立しており、また池田清助が明治28年に「新古美術工芸品販売」を目的とした池田合名会社を設立³³している。海外への輸出と同時に、京都へくる外国人相手に「美術品」を売るこうした会社は四条・三条間の鴨川周辺から東側の地域に多かった。

そうした美術商の一人池田清助が、東山に「美術館」を建設に着手したのは京都での内勤博の開催を控えた明治25年であった。池田清助³⁴は天保10（1839）年紀伊国伊都郡隅田村生まれ、神戸に出て越後屋と称し外舶乗組員らに雑貨を販売する商いを始めた。明治7（1874）年神戸の居留地36番地に店舗を出店し明治9（1876）年店員を英国に出張させるも失敗、これを挽回するために神戸で和歌山藩御庭焼の交趾焼を製出するも、費用倒れで損失をこうむった。そのほか縫箔屏風をつくり、象嵌細工、七宝、粟田焼、九谷焼、漆器、彫刻などを工夫し外人の嗜好に適するようにした。明治14（1881）年農商務省商務局長前田正名と出会い、その援助で政府より5万円の保護金を得、店員谷治作と長子清右衛門（2代目清助）夫妻をロンドンに派遣し丸越組ロンドン支店を開く。しかし翌年政府が方針を転じ保護金をとりあげられた上、現地雇人の不正行為により数万円を失いロンドン支店は閉鎖した。明治19（1886）年4月に自身がロンドンに渡航し支店残務整理のかたわら英仏両国の商況を視察、開港以来多数輸出された蒔絵漆器類が米国では気候の変化で往々剥落破裂するのを、素質を薄い銅で製造し絹布で表面を張り精巧な金蒔絵を施す製造法を新発明した。

明治20（1887）年帰国、海外での経験を生かし全力を新製品に注いでついに東山に「美術館」の新築を見るにいった。明治27（1894）年池田は刺繍・交趾焼等の製作輸出や海外の商況の視察による販路拡大、参考品としての美術品収集や社会事業等の功績により緑綬褒章を受けた³⁵が、その受章記念として古門前の新宅「美術館」で新古美術の陳列を十余日おこない、毎日祇園中村楼で宴会をおこなった。その様子を書いた雑誌記事の「美術館」の説明³⁶からは、座敷と陳列室を備え、楼上には十幾の小室を有し、また同敷地内部には職工場・蒔絵の工場も備え付けた

ものであったことがわかる。

室内の装飾の様子に目をやると、褒賞の書やそれに関わる品々が飾られているのはもちろんのことであるが、蒔絵の棚・陶器・七宝・象牙細工・彫刻木像・鉄象眼（池田家特有という）・新薩摩焼等いわゆる工芸品によって装飾されている。それらは「貿易ヲ目的トシタル」「一万円以上」の高級品で、その形態は日本人の嗜好にはそぐわないものの海外の人々は店・工房にも毎日訪れこれを争って買うという。前述の通り、当時池田は外国人向けの新古美術工芸品販売会社を設立しており、「美術館」は一種のショールームであった。そこに「美術館」という名称をつけたのは同時期にあった内勸博の「美術館」を意識し、一種の権威付けをおこなうものであったのだらうし、それと同等以上のものをそろえたとの自負のあらわれであったのかもしれない。

そして、この「美術館」は外国人の顧客を意識したものであった。当時京都で、川島甚兵衛³⁷と有志が市内にホテル建設の計画とともに「美術参考館」を計画し、京都物産中の美術品のみを蒐集し旅客の縦覧に供し³⁸、関西貿易会社が自社内に新古美術品を蒐集し顧客の縦覧に供する美術品陳列場を設けている³⁹。これから考え合わせると、旅客の誘致と京都の「美術」とは関連する事業として認識されていたことがわかる。池田自身も明治25年常盤ホテルの経営悪化時に他の貿易商と救済に乗り出し、その後身である「京都ホテル」発足に際しても株主として参加するなどホテル経営に注目している⁴⁰。加えて、明治28年の内勸博時の外国人向けの案内書のひとつ⁴¹に“LOISONNE ENAMEL”の業者として池田清助が掲載、巻末の広告部分にも同社の広告を見ることができる。また“BRIC-A-BRAC STORES”の項目では林（新助）と山中（商会）と池田が製造・販売業者として外国人観光客に紹介されており、こうした宣伝の効果か、スタンフォード夫人やフリーアが顧客として同店を訪れたようだ⁴²。とくにスタンフォード夫人は、のちに2代目池田清助から池田のコレクションの一部を購入、それらは現在もスタンフォード大学美術館に収蔵されている。

以降も貿易商・通弁が也阿弥ホテル楼・京都ホテルの出資を得て明治31（1898）年3月弁天合資会社（繻織物の製造・販売）を設立、ホテルに滞在する外国人への営業を独占しようとする⁴³、大阪の美術商山中商会が上京区寺町通御池下るにあった⁴⁴支店を明治38年東山の粟田口三条坊町14に移転、大正5（1916）年2月に山中合資会社として独立するなど東山では外国人相手の美術商が集中した。またこの時期の池田合名会社には、後に海外で知られるようになる駒井音次郎（象嵌製造）⁴⁵や美術商富田熊作⁴⁶が所属し次代の業者を育てた一面もあった。山中商会京都支店も、複数階建ての和風陳列館・寺院風陳列館を設け、大正年間には洋館を建設、敷地内に職人たちの作業場を有していたといい⁴⁷、池田の「美術館」がひとつの模範となったとも考えられる。明治39（1906）年3月9日ミッドフォードの⁴⁸来日時の記録にも京都で東山の「林某」の骨董店に行くとの記述があるように、東山界隈での美術品購入は京都観光の名所・楽しみのひとつだった。東京の政治家・実業家の別邸が多く造営され⁴⁹、京都の美術商が中心となり明治40（1907）年秋の東山茶会や、大正10（1921）年11月19～22日の洛陶会主催「東山大茶会」といった大規模な茶会も開催される⁵⁰。粟田焼の産地に近いなど、東山という地域のなかでも北の岡崎（内国勸業博覧会）と南の七条（帝国京都博物館）にはさまれた場に美術商は活動の根を下ろした。

おわりに

明治28年京都に二つの「美術館」が出現した。一つは内勸博の「美術館」、もう一つは池田清助の「美術館」である。いずれも当時の技巧をこらした新製造品を展示し、そこに展示されたものは購入することも可能であった、という意味では、鑑賞を第一の目的とする現代の美術館のありようとも若干異なるその時代特有の「美術館」のありかたを示していた。明治政府のすすめる輸出産業としての「日本美術」に関るといっても同じ系譜に属する二つの「美術館」であるが、同時に官と民という大きな違いも抱えていた。内勸博では官中心で「美術」概念にのっとり出品規定や評価軸の形成や展示・品評がはじまり、同時におこなわれた京都博覧会のなかにそうした流れは現れ始めていた。一方、そうした京都博覧会の中核からは離れた美術商がつくった「美術館」は、明治初期から続く殖産興業的な外国人相手の「日本美術」販売を商売の中心におき、池田自身は早くに姿を消してしまうにせよ、「日本美術」の海外輸出・外国人への販売自体は山中商会や林商店等の同業者により第二次大戦終結頃まで続く。彼らの多くが美術工芸を扱うことから「日本美術」における美術工芸と産業との境目、美術工芸とは何なのかという重

要な問題が浮上するが、今回はそうした考察についてほとんど触れることができなかった⁵⁰。海外輸出や海外コレクターとつながる「日本美術」の伝達者としての役割、彼らの要求にあわせた「日本美術」製造者の役割をもつ一方、東山という地域においては近代茶道の興隆にあわせ政界・財界人と交際し、あらたな数寄概念の形成にも関わる京都の近代の美術商の姿については、今後問題を整理して考察にとりくまなくてはならないと思われる。

〔表 各回の出品数上位者〕

	10～19点	20～29点	30点以上
明治4年	葉山堂、川辺氏、 ^(ママ・デュリーか) シュリー、清雅堂、小野氏、中森氏、下村氏	三井氏、鳩居堂、	なし
明治5年	仏人マロン氏、葉山堂、久我家、青木藤、(西)本願寺、小倉県下永野九助、来迎寺、島田八郎右衛門、天使突抜三丁目、日本支那貿易商社、大阪片江屋亀次郎、大阪山中吉兵衛、下坂本来迎寺、大徳寺、林鐘坊、松原中之町、黄檗山緑樹院、大阪四天王寺、奥田和三郎、川辺九郎三郎、中森清兵衛、松浦圓三郎	東寺	刀商社、長瀬藤兵衛、島川長治郎、滋賀県管下坂本村笠川早之助、
所蔵 明治6年	近衛家、八木宗兵衛、大徳寺、藤林源助、水莖氏、博覧会社、妙蓮寺、藤井源介、東寺、薬種屋中、美濃部吉右衛門、伊良子氏、三宝院、博覧会事務局、横村氏、吉田豊蔵、	本隆寺、小林良孝、雨森善四郎、市田理八、能勢角右衛門	鳩居堂、久我家、舎密所、本願寺、御物、明石氏
出品 同上	杉田三郎助	亜墨利加国ブラウン、茶器商社	清雅堂、植木商社
所蔵 明治7年	智積院、妙蓮寺、山本弥太郎、雨森善四郎、百々俊達、美濃部吉右衛門、本願寺、鳩居堂、三井八郎次郎、中森清兵衛、津田信克	八木宗兵衛、御物、本隆寺、島田八郎左衛門、近衛家	小林良孝、伊良子光信
出品 同上	村上勘兵衛	なし	茶器商社
売品 同上	高橋吉兵衛、林新助、国松栄吉、葉山堂、中澤半兵衛	鳩居堂	清雅堂
所蔵 明治8年	小林良孝、妙法院、高松家、津田信充、本能寺、藤林源助、大仙院、山本弥太郎、本国寺 ^(西)	大雲院	博覧会社、山科家
出品 同上	なし	東京博覧会事務局	なし
売品 同上	林耕雲	なし	なし
出品 明治9年	飛鳥井家、小林良孝、下村正太郎、三井八郎右衛門、下京十六区嶋原女紅場、上京区二十二区女紅場、下京区廿二区下河原女紅場、吉田豊、五條坂陶器商 西田伊八	下京第廿区宮川町女紅場	下京六区先斗町女紅場、本願寺、上京三十二区二条新地女紅場、下京廿六区七条新地女紅場

* 『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』より作成。ただし出品表が二つ収録された年は収録数の多いほうを使用(明治5年はA表を、明治8年はB表を使用)。明治6年以降は出品・蔵品・売品などが比較的明確なため項を分割。明治9年の売品には10点以上の出品者なし。下線は骨董商(判明分のみ)。

注

- 1 北澤憲昭『眼の神殿』美術出版社、1989。佐藤道信『〈日本美術〉誕生』講談社、1996。佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999。木下直之『美術という見世物』平凡社、1993ほか。
- 2 吉田光邦『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986。國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』岩田書院、2005ほか。
- 3 京都博覧協会編纂『京都博覧会沿革誌』1903（復刊：フジミ書房、1997）。『京都博覧協会五十年（^{（マ）}）記要』京都博覧協会、1920。大槻喬編『京都博覧会史略』京都博覧協会、1937。本稿では上記の文献内で取り上げられた京都博覧会社主催の博覧会・展示会等を「京都博覧会」として取り扱う。なお上記資料をもとに『市政史料 No.38 京都博覧会史（戦前）』京都市歴史資料館、1988が発刊。
- 4 丸山宏「明治初期の京都博覧会」吉田光邦『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986。
- 5 小林丈広『明治維新と京都 公家社会の解体』臨川選書、1998。
- 6 吉岡拓「第二回京都博覧会の開催—「伝統都市」京都の黎明—」『近代日本研究』22、2005。
- 7 中谷至宏「「作品」という制度—京都における美術館・展覧会史をめぐる—」岩城見一編、シリーズ・近代日本の知第4巻『芸術／葛藤の現場—近代日本芸術思想のコンテクスト—』見洋書房、2002。
- 8 「京都の初期博覧会における「古美術」」丸山宏・伊從勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版、2008。
- 9 佐藤道信「ジャポニスムの経済学」『近代画説』4、1995。東京美術倶楽部百年史編纂委員会『美術商の百年』東京美術倶楽部、2006。
- 10 長谷川栄「起立工商会社 明治初期工芸職人団の組織と活動」『MUSEUM』232、1970、樋田豊次郎「起立工商会社の工芸図案」『起立工商会社工芸下図集：明治の輸出工芸図案』1987。
- 11 定塚武敏『海を渡る浮世絵 林忠正の生涯』美術公論社、1981。木々康子『林忠正とその時代 世紀末のバリと日本美術』筑摩書房、1987。小山ブリジット『夢見た日本』平凡社、2006。林忠正シンポジウム実行委員会編『林忠正—ジャポニスムと文化交流』ブリュッケ、2007。
- 12 桑原住雄「山中商会盛衰記」『芸術新潮』第18巻、第1号、1967。富田昇「中国近代における文物流出と日本 山中商会展観目録研究—世界篇—」『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』15、1996。富田昇「山中商会展観目録研究—日本篇—」『陶説』538号から543号、1998。富田昇『流転 清朝秘法』NHK出版、2002。門田園子「英国における日本美術コレクションの形成過程」『デザイン史学』3号、2005。門田園子「山中商会「日光式展示室」について—明治期様式家具と室内装飾のスタイルに関する一考察—」『デザイン理論』44号、2004。小熊佐智子「山中商会の「美術加工品」について」『芸術学研究』9号、2005。小熊佐智子「山中商会の文化支援活動と経済活動の関わりについて」『芸術学研究』10号、2006。
- 13 「日本の「美術製造品」を取り扱ったイギリス系商社」『デザイン学研究』vol.51-No.3、2004。
- 14 「起立工商会社の工芸図案」『起立工商会社工芸下図集：明治の輸出工芸図案』1987。同「明治の工芸を輸出したひとたち」『ナセル・D・ハリリ・コレクション—海を渡った日本の美術—』第1巻論文篇、同朋舎出版、1995。
- 15 『京都ホテル100年ものがたり』京都ホテル、1988。
- 16 天野太郎「外国人向けホテルの黎明」丸山宏・伊從勉・高木博志『みやこの近代』思文閣出版、2008。
- 17 加藤哲弘・中川理・並木誠士編『東山／京都風景論』昭和堂、2006。
- 18 東京文化財研究所編『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』中央公論美術出版、2004。
- 19 中谷前掲論文。
- 20 当時は「美術」概念が確立していないため「美術」商という名称は正確ではない。同時代資料で彼らが「骨董商」と呼ばれていることから、ここでは「骨董商」の名称を用いる。
- 21 『売買ひとり案内』ほか。ただし、同店の明治・大正期の資料・伝票・帳簿類に「骨董」の分類語句は散見できるものの、あくまで主要業務は薫香・文具商であったという。熊谷純三氏の御教示による。
- 22 以下『売買ひとり案内』（1878年）・『西京人物誌』（1879年）（以上『新撰京都叢書』6、臨川書店、1985所収）・『京都市姓氏歴史人物大辞典』を参照した。
- 23 英米等に支店を置き日本・東洋美術を販売し有名になる山中商会を起こした山中家の一人。明治期の山中家の活動は拙稿「美術商山中商会」『コア・エシックス』4、2007ほか参照。なお明治5年京都博覧会での大阪の出品物を蒐集に関して山中吉郎兵衛他2名の尽力に対し褒賞として新貨125銭が贈与されている。
- 24 「本草家」は薬品、「描金」は時絵、「彫鏤」は打物をさすという。『京都博覧会史略』より。
- 25 『博覧会品評録』上・下、京都博覧会社、1873の「ヘー氏（トルレルムヘー）」「デュリー氏」のコメントは、描画・装飾の美的・技術的な評価は「質」が「佳ナリ」「可ナリ」といった簡潔かつ単純なものがほとんどだが、器の大きさや取手をつける位置など形態・着色や画題などには西洋人の嗜好や生活習慣、器物の使い方などからの具体的なアドバイスがつけられた。
- 26 京都博覧会に関する資料はいずれも博覧会協会が後年編纂したもので、出品内容すら初期のものしか現在あきらかでなく、同時代の内部状況については確認がとれない。『京都博覧会沿革誌』等では本会の審査の精確を期し、内務省より相当官吏の派遣を申請したと記述

するのみである。

- 27 明治 22 年 5 月図書寮附属博物館廃止ののち帝国博物館・帝国奈良博物館と共に設置が定められた。
- 28 越前俊也「第四回内国勸業博覧会の美術館—その展示空間と「湊合の観察」について」『博物館学年報』39、2008。
- 29 古代ではなく延暦時代(桓武天皇)を起点に展示を開始している点に注意する必要がある。京都を平安時代や国風文化と結びつける「古都」としてのイデオロギー形成に関しては、高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店、2006 に詳しい。
- 30 明治 13 (1880) 年画家たちの建議で陶工・呉服商らの寄付金により設立された府画学校が同 22 (1889) 年 12 月市の所管となり京都市画学校に改称、2 年後には京都市美術学校に、さらに同 27 (1894) 年京都市美術工芸学校となった。ちなみに明治 22 年 2 月東京美術学校が開校している。
- 31 明治 23 年発足した京都美術協会が主催した展覧会においても、明治 28 年の開始当初より出品作の販売がおこなわれていたが、出品の監査が始まった第 3 回からは購入希望があっても会期が終了するまで展示される審査品と持ち帰り可能な即売品の二種で構成された即売室が設けられ、販売の場としての機能が次第に失われていく。とくに絵画はしだいに出品全体に占める割合が大きくなっていくが、展覧会開始当初より非売品の割合が他の美術工芸品とくらべて高く、第 13 回(明治 41 [1908] 年)から設けられた招待出品の作品はすべて非売品で展覧会の販売の場としての役割は消えていくという。中谷至宏「会場の美術—京都における展覧会史にみる絵画の位置」『美学』211、2002。
- 32 同日付『京都日出新聞』より。ただし『京都日出新聞』明治 21 年 9 月 21 日記事によると、公式には明治 21 年 5 月 5 日設立となるようである。資本金 5 万円。
- 33 『京都府勸業報告』第 14 回(明治 29 年) 資本金・同払込金の記載はなし。組合員 5 名。同第 16 回記載では資本金 15 万円、払込金 15 万円、組合員 22 名となっている。
- 34 池田清助の伝記は『大阪毎日新聞』明治 33 年 10 月 1 日掲載「新立志伝」を基本に記述した。この記事は『得生院十三周忌紀念』(私家版) 1912 (京都府立総合資料館所蔵)・「新立志談 池田清助翁の傳」中井繁信『真土の歴史』(非売品) 1994 (北川久氏によりご教示いただいた。)にも転載。「池田清助」桜井敬太郎等『京都府下人物誌第 1 編』金口木舌堂、1891、「池田清助君ノ名誉」『京都美術協会雑誌』19 号、1893、「池田清助氏」黒田謙『名家歴訪録』(中) 1901 など当時の立志伝にも数多くとりあげられている。
- 35 『京都府誌』(下) 第十五編褒賞、1915。
- 36 「○池田清助君ノ受章振舞 去年緑綬章ヲ拝受シタル振舞ニ、本会評議員池田清助君ハ、古門前ナル建築落成ノ新宅ニ於テ新古美術品ノ陳列ヲナシ、十余日間引継キ、毎日祇園中村樓ニ於テ盛宴ヲ張り、貴顕紳士ヲ招待サレタリ、陳列ノ模様ヲ略記センニ、座敷ニハ緑綬章下賜ノ文ヲ床ノ間ニ掛ケ、有栖川宮ヨリ下サレタル弘法大師真筆ノ御品ヲ始め、数多ノ贈品ヲ山積シタルガ、中ニモ目立チタルハ神戸貿易会社ヨリ贈リシ径三寸ニ余ル金杯ナリ、陳列室ニハ貿易ヲ目的トシタル種々ノ物品、蒔絵棚ノ偉大ナルアリ、陶器ノ丈夫ナルアリ、七宝ノ五彩麗ハシキモノ、象牙細工ノ緻密驚クヘキモノ、彫刻木像ノヲカシキモノナト、価ヲ問ヘバ少キモ数百金ヲ下ラズ、多キハ一万円以上ナリ、此種ノ品固ヨリ本邦人ノ嗜好ニ適スベキモノニハアラザレドモ、海外人ハ皆相競フテ買フ物タリ、主人ガ外人ノ嗜好ヲ能ク察シ、種々ノ物品ヲ製作セシメテ、数千金ノ高価ナル品ト雖モ、彼等ガ喜ビテ購ヒ去ルハ、真ニ他ノ美術家ヲシテ後ニ瞠若タラシム、楼上ニ登レハ此ニハ新古ノ真美術品ヲ多ク陳列セラレヌ、夫ヨリ十幾小室ノ陳列、皆貴重ナル美術品、一々枚挙シ能ハズ、日ナラズ目録書ノ印刷成ルヨシナレバ、次号ニ掲クルコトモアルベシアリ、振舞中ハ職工場ヲモ陳列場トナシ、蒔絵ノ工場ニハ製作ノ新タニナリシ蒔絵具ヲ陳列シタリ、サレバ池田家特有ノ鉄象眼ノ精巧ナル品モアリ、新薩摩焼ノ艶麗ナル物アリ、七宝モアリ、彫刻モアリ、関西ニ貿易商ヲ以テ知ラレタル丈ケ、事業亦甚タ大ニ、範圍從テ広ク、多クノ職工ヲ役シ、外人ノ来ラザル日ナシト云フ、又聞ク氏ハ初メ七拾六円ノ資本ヲ以テ事業ヲ起シ、幾回カ失敗シタルモ、終ニ今日此ノ名誉ヲ得ルニ至レリト、而シテ今日マテニ手代ハ職工ニ旅費ヲ給シテ、海外ニ商業ノ視察或ハ技術ノ観察ニ航セシメタルモノ、十三人ニ及ヘリト云フ、知ルヘシ氏カ今日アル偶然ニ非常ラサルコトヲ、又氏カ国家ノ為メニ期スル所ノ小ナラサルヲ、氏又云フ内輪喧嘩ハ我カ目的ニアラスト、蓋シ本邦人ハ我事業ノ顧客ニアラス、唯海外人ヲ以テ己カ工芸ノ好華主トナセルノ謂ナリ、イカニモ一基ノ書架ニ一万円ヲ投シ、一個ノ鉢ニ数千金ヲ擲ツモノ、海外人ニアラサレハ為シ能ハサルナリ、」『池田清助君ノ受章振舞』『京都美術協会雑誌』20、1895。
- 37 2 代目川島甚兵衛(1853～1910)。西陣織・綴織の技術改良に尽力。明治 19 年織物研究のため渡欧、ゴブラン織を研究して帰国し綴織の技術開発に努め、内外の博覧会などに出品してたびたび受賞し、現在の川島織物の基礎を作った。明治 25 年緑綬褒章受章。
- 38 『中外電報』明治 22 年 5 月 24 日「大「ホテル」と美術参考館」。なおこの施設は株式会社川島織物セルコンの企業博物館「川島織物文化館」(1984 年開館)に継承されている。
- 39 『中外電報』明治 24 年 4 月 19 日付「美術品の蒐集」。
- 40 前掲『京都ホテル 100 年ものがたり』。
- 41 F.BRINKLEY, "THE KYOTO INDUSTRIAL EXHIBITION OF 1895: HELD IN CELEBRATION OF THE ELEVEN HUNDREDTH ANNIVERSARY OF THE CITY'S EXISTENCE", 1895.
- 42 Patrick J. Maveety; "The Ikeda collection of Japanese and Chinese art at Stanford", Stanford University Museum of Art, 1987.
- 43 弁天合資会社、新古織織物並ニ製造、下京区新門前大和路東へ入、明治 31 年 3 月設立、資本金総額 10 万円、払込済資本金 1990 円、

最近利益配当1割2分、株主人員11（『京都府勸業統計報告』第16回、1898）。『京都日出新聞』明治31年7月8日記事「京都貿易商の競争（上）」。

44 『京都府勸業統計報告』第18回、1900。

45 代々京都で刀剣師を家業としていたが、明治維新後駒井周亮（1842～1917）の代になって金属象嵌品をつくりはじめ、西洋向けの置物や飾り物をつくったところ好評。神戸の池田の目にとり池田合名会社と一手取引の契約を結んだ。明治14（1881）年頃には京都で新居を構えるまでになったが、明治18（1885）年に家産を失い音次郎は池田合名会社の社内職人となってほぼ10年間働き明治27（1894）年再び独立。ヨーロッパで名声を博し、大阪の山中商会や海外へも卸売りの輸出をおこなった。前掲樋田「明治の工芸を輸出したひとたち」、『京都新繁昌記』より。

46 1872～1953。現在の兵庫県に生まれ12歳で池田合名会社に奉公にでる。明治27（1894）年池田合名会社社員として渡英、同社解散後の明治36（1903）年山中商会入社、1919年よりロンドン支店長を勤める。1922年山中商会を辞め日本に帰国、京都で古美術品の店を開く。アルフレッド・パウアー夫妻の日本・中国美術の買付けや調査研究に協力したことで知られる。大塚融「静思館・富田熊作と大阪・山中商会」『猪名川木喰会通信』vol.12、2000。

47 「●山中支店落成披露 粟田青蓮院前に新築したる大阪山中春篋堂の支店落成に付昨日より三日間其披露式を挙行し昨日は府知事、各事務官、貴衆両院議員、市長、府会議員、市会議員、各宗管長其他外国紳士^(判読不能)二百五十名を、本日は鴻池、住友、三井其他前田侯等特に同家の顧客として由緒ある旧家を、明日は京阪其他の同業者に縦覧を請ふ事^(ふくかざり)したり建築は宏大なる日本風三階建にして之を一室より八室に区分し和洋風室内装飾、古書画展覧、煎茶、陶器、彫刻、銅器、服飾等^(判読不能)に頒ち随意観覧に供し^(判読不能) 順路庭園に下りて眺望を縦にせしめ最後に三階に於て酒飯を饗したるが各室構造の多趣多様にして陳列器玩の貴重にして饒多なるもし子細に観覧せば一室一日を費して尚足らざるが如くなり」（『日出新聞』1905年5月7日）。なお同社の一部は現存しており国の登録有形文化財である。2008年4月17日、元京都美術倶楽部社員中西治氏のご教示による。

48 A.B. ミッドフォード『ミッドフォード日本日記』講談社学術文庫、2004、p195。

49 矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山における別荘地の形成と数寄空間」『野村美術館研究紀要』Vol.5、1996ほか。

50 矢ヶ崎善太郎「趣味世界としての東山－東山でおこなわれた茶会をめぐって」加藤哲弘/中川理/並木誠士編『東山/京都風景論』昭和堂、2006。

51 稲賀繁美編『伝統工藝再考 京のうちそと一過去発掘・現状分析・将来展望』思文閣出版、2007において、(美術)工芸概念をめぐる重要な論点がいくつも提出されている。

* 本稿執筆にあたり、大塚融氏、北川久氏、京都美術倶楽部、中西治氏、熊谷純三氏より資料の提供をはじめご教示いただきました。末尾ながらこれを記し深謝の意を表します。(五十音順)

Reception in Kyoto of the Concept of “Art” Promoted by the National Government in the Meiji Period: Exhibitions, Antique Art Dealers and a "Museum" in Kyoto

YAMAMOTO Masako

Abstract:

This paper attempts to shed light on the activity of antique art dealers in Kyoto during the early Meiji period and their reception of the concept of “Art,” which the national government at the time was promoting in Kyoto. The research is based on newspaper articles and official documents of the time.

From 1871, an event known as the Kyoto Exhibition was held almost annually. It was a venue where manufacturers and antique art dealers participated in screening and exhibiting items. However, antique art dealers were driven out from the management of the Kyoto Exhibition in the wake of the National Industrial Exhibitions (*Naikoku Kangyō Hakurankai*), which were designed under the influence of the concept of “Art” sponsored by the national government. Consequently, art dealers established their own exhibition hall in Kyoto’s Higashiyama area to sell and display their products. This paper focuses on the figure of Seisuke Ikeda, an art dealer who ended up building his own “museum” in the Higashiyama area.

Along with Ikeda, many other Kyoto art dealers also seem not to have been able to effectively harmonize their traditional concept of Japanese art with the newly developed concept of “Art” sponsored by the government.

Keywords: Meiji period, Kyoto, art dealer, exhibition, Higashiyama